

たことがあった。このようなとき、会社の紐がついているとか、いやしげな考えを持つ者もいるが、そんな人こそ一社の利益を計ったりする者で、笑えない喜劇である。

討 論

(資料の利用について)

今井 測候所に集積されている資料を使いやすい状態にしてほしい。このために資料センターのようなものを作ることが望ましい。

新井 これについては、資料発表の型式に関して利用者側の註文を出してほしい。

佐々木 資料集積の方法について、写しを、IBM 式にしておくか、写真にしておくか考える必要がある。

北岡 Aerological Data などについて、どういう風に利用したいのか、具体的な要望を出してほしい。目的をきめないで、ただ観測をして資料をためておくというのはよくない。何のために何を測るかをきめないといけない。他の目的には使えなくても、集中的に目的をきめて観測をする方がよい。

高橋 霜害その他微気象観測の資料は研究者が個々にかなり集めているから、これらをまとめて出版してほしい。ルーチン観測と同時に、研究用の特殊観測を考える必要がある。これには機動的な観測方法を取り、その結果を出版することが望ましい。

今井 例えば研究のために毎時の天気図を書こうと思っても資料ができていないので非常に不便を感じる。自記紙がどこでも見られるようにする必要がある。あるいは、昔のように自記紙から毎時の値をよみとっておくとよい。

大田 資料の活用がうまくいかないのは現在の観測が多目的利用になっていて、結局はどの目的にもピタリと役に立たない点にあると思う。観測の種目、方法を利用目的に合せて整理したい。

(臨時観測、研究観測について)

藤原 現在の風速計は古いものであって、その資料はあまり役に立たないから、もっと自動化してよい資料を作してほしい。

北岡 すべての観測をルーチン化しようとする欲望が強いが、この考えをすててしまわない限り、プロジェクトはできない。研究的臨時観測を有効に利用することが望ましい。何の役に立つかをみとめてから観測することが大切である。微気象に関するものは機動的な観測方法をとるとよい。

久米 観測はルーチンにしておきたい。例えば、台風の臨時観測の規則を作っておいても、ルーチンでないものは完全には実施されない。

北岡 現象の研究のための臨時観測が必要である。しかし現在では台風の臨時観測用の人がない。ルーチンでなくてやるのはむづかしいが、既設の観測所でやることはできると思う。

(新しい観測について)

高橋 現在の観測は予報に重点がおかれているが、気象学の発展にともない、超高層、放射性物質などの観測も行う必要があると思う。それには、現在の観測を自動化して、余裕を作り、それによって行うのが必要だろう。

北岡 超高層の観測は重要である。気象におよぼす影響の限度は 50km までと思われるが、50km までは気球は昇らないから、ロケットで観測する必要がある。しかしこれは費用がかかるので、例えば、日射の変動の測定など必ずしも日本でやる必要はない。

藤原 雲物理の研究のためには、飛行機観測をする必要がある。

橋本 現在飛んでいる飛行機を利用すれば、ある程度資料は集められると思う。このためには、観測方法を十分指導して徹底させる必要がある。そうすれば、洋上の観測資料はかなり集められる。

(IGY 観測について)

篠原 IGY の資料利用についての要望を伺いたい。

北岡 IGY の気象資料は各部分で整理している。日本でも IGY の形式で WMO に報告している。日本の資料はそろっているのでいつでも出せる。全世界の資料は予算がまだないので入手出来ないが考えている。

高橋 資料のあるところを一般に知らせてほしい。

TELLUS の意味

“TELLUS” という機関誌がスウェーデンの学会から出されていることは衆知だが、これが出初めたときは、この意味がはつきりしなかった、TELL US (我々に告

げよ) をつづめたものであるという説も出たし、「天照らす」の“てらす”であるという説も出たが、正しくはラテン語で TELLUS は地球という意味で、その上に Tell us ともなるから、機関誌名としてはまことにうってつけの名というべきであろう。(A.K.)